

## 大阪私立中学校高等学校連合会長賞

### ゆーくん

私が小学校のときの登校班にいたある男の子の話です。

その子が一年生で入ってきたとき、私は小学四年生でした。その子は私とマンションも同じで前から知っていました。その子は他の子より少し歩くのが遅くて、途中で道端の植物や歩いてきた犬に興味をもち止まったりするような子でした。その子は、ダウン症でした。最初は班全体の歩くのも遅くなるし、止まったりしてしまふので、学校に遅刻してしまったりもしました。班の中の子の中にはそれを嫌がる子とかもいて私も少し「遅くなるのいやだなあ」とか「恥ずかしいな」と思うことがありました。

私が小学五年生になったとき、私は登校班の班長になりました。一番先頭で歩く私と後ろにいるその子との間には長い距離ができてしまっていました。そのときその子は傘を引きずって歩くのが好きでした。それで後ろの子に水たまりの水がかかったり、つまずきそうになってしまうこともありました。班員の下級生はすごく嫌そうだったし怒っている子もいました。その中で上級生の私たちはどうにかできないかと養護教諭の先生と話したりもしました。そして決まったことは、その子も同じ小学生。きつと学校へ楽しく行きたいはず。だからその子を楽しませてあげながら学校に行けば私たちも楽しく学校に行けると思ったのです。

まず、呼び方から。みんなが名字で呼んでいたのを「ゆーくん」とみんなで呼ぶようになりました。ゆーくんになってから特に下級生の子たちが積極的に話しかけたりすることができ、歩くのも少しスムーズになり、ゆーくんにも時々笑顔がみられたりしました。でもやっぱり途中で止まってしまうことはありました。

そして私たちはゆうくんを学校まで手をつないで行こう、と決めました。その時五年生は3人いて、その3人が日替わりで先頭でゆうくんと手をつないで歩くことにしました。私の学校の前にはとても長くて急な坂があります。そこは特に大変だったけれどちょっと疲れやすいゆうくんはもっとしんどいはずで、みんなで頑張れと言ったり荷物を持ってあげたりしました。するとみるうちに歩くのも速くなって、スムーズに登校できるようになっていきました。たまにしんどいなと思うときもありましたが班のみんなやいろいろな人に助けってもらうことでもかなり助けられたと思います。

ダウン症のゆうくんは、少し歩くのが遅かったり、少し疲れやすかったり、少し話すのが苦手だったりします。でもたったそれだけです。少しです。「障害がある」というだけですぐに接するのを止めるのは良くないと思います。「どこかが違う」とか「何が違う」とかそういうことではなくて、違いがあるのを違うと考えず、個性と私は考えます。もしその個性がちょっと周りが困ってしまうようなものなら、周りがそれをサポートしてできるだけ困らないように。でも自分たちのことばかりでなく、その障害がある子にも楽しく思ってもらえるようにすることが大切だと思います。

障害がある人とならない人。私はそんなに変わらなれないと思います。どちらも一つの大切な命、一つの大切な一生だと私は思います。